

コーの会議に参加して 画一性と多様性 会長 矢野 弘典

去る7月はじめに、コーで開かれた会議に出席しました。その週のテーマは“Just Governance for Human Security”（安全への公正な統治）でした。

今年はアフリカからの若い参加者が多く、それぞれの国の政治・経済状況だけでなく、教育・貧困・労働・部族などの社会問題についても、赤裸々に報告がなされ、活発な意見が交わされました。

ここで改めて気づいたことが、表題の問題です。グローバル化が進み、世界標準という名の画一性を求める動きが強まる中で、国や地域の持つ文化や社会の多様性を、もっと重視すべきではないか。画一性 Uniformity と多様性 Diversity の両立が必要ではないかと考えたのです。このことは会議の場でも発言しましたが、寛容性のある社会づくりという意味で、重要なテーマだと思いません。

コーに行く前に、ロンドンでICの旧友であるピーター・ヴィッカーズ氏に会いましたが、「Unity は必要、Uniformity は良くない」という点で意見が一致しました。志や理念を共有することは大事だが、形を同じにする必要は全くないということです。

有意義な夏だったと思っております。



第16回東北アジア・日中韓青少年フォーラムの開催 専務理事 足立 憲昭

今回のフォーラムは、日韓関係が厳しい対立が起こっている中での韓国訪問となりました。また、今回は定員を超える応募がありました。8月18日韓国ソウルの金浦空港に集合した瞬間、日本での報道と異なり、日本人を温かく歓迎する雰囲気を感じられ安心しました。

日韓討論会で大学生たちは、お互いを正しく知ることに力点をおき良かったと思います。特に、現代史において、日本と韓国が「現代史を教える量と内容」が大きく異なっていると感じました。

東北アジア（日中韓）青少年フォーラムでは、言葉の壁が、SNSによるコミュニケーションや情報化ツールの活用での通訳・翻訳によって低くなってきたことを実感しました。しかし、日本の大学生たちの発信パワーが、韓国や中国の大学生たちの発信パワーに比較して弱すぎることに驚きました。特に、異文化コミュニケーションでは、言語学習だけでなく、「自分の意見」を整理して、「相手の意見」と闘わせる強いマインドが重要です。

将来の日本を担う若きリーダーに、機会を提供する機関として、私は、国際IC日本協会がこの事業を発展させるべきと思いました。



青少年フォーラム引率を体験して 理事 成 豪哲

私は、この度、引率として東北アジア青少年フォーラムに参加するため、8月18日から24日まで韓国に行っていました。

今年は、日本からの参加学生が例年よりも多く、北海道から関西の学生まで様々な背景を持つ学生が集まりました。学生たちは、当初、日韓関係の悪化を煽る報道に影響され、不安を覚えることもあったようです。

しかし、実際にフォーラムに参加して、多くの韓国・中国の学生と交流を重ね、相互理解と固い友情で結ばれることとなり、いかに日常生活において偏向報道によって分かった「つもり」になっていたかを実感しておりました。そして、何よりも、異なる文化的背景を持つ人達が一堂に集まり、一つのテーマについて異なる言語で議論し、一つの結論を導き出

すことがいかに難しく、貴重なことであるか身をもって体験したはずです。

なお、本年度は韓国国会副議長である李柱栄議員と執務室で懇談する大変貴重な機会も頂きました。

最後に、韓国 MRA / IC本部の車光善総裁をはじめスタッフの皆さまには、このような素晴らしい機会を提供いただいたことについて、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



東北アジア青年フォーラムに参加して 北海商科大学 本間 麻友

今回、引率として本フォーラムに参加させて頂き、学生として参加した時とは異なる貴重な経験になりました。

日本での事前準備時に日韓関係が悪化した中で、延期される事なく開催され、改めて学生交流の重要性を学び、交流を続ける事に大きな意味があると感じました。

本フォーラム開催にあたりご尽力いただきました韓国 MRA/IC 本部、国際 IC 日本協会、又、私は初めての引率だった為、足立専務理事、成理事、須崎さんのサポートに心より感謝いたします。

フォーラム中には、日ごとに親しくなっていく学生を見ていて、閉会式後に仲良くなった友との別れが寂しく、大泣きをした私自身の初参加時を思い出しました。それから数年が経ち、フォーラムで知り合った友とは今でも頻りに連絡を取り、毎年再会をしています。

年々話す内容が濃くなり、参加当時には想像もつきませんでした。更に、フォーラムで出会った友の存在が語学習得の意欲になり連絡を取り続けてい

て、フォーラムの終了こそが交流の始まりだと思います。

今回のフォーラムで出会った方々とまたお会いできる事を楽しみにしています。



本年の学校訪問プログラムには、インドの IC センターでのインターンシップを経験した13名(8か国)からの応募がありましたが、厳選の末、アフガニスタンのサマルクァディさん(在カブール・エジプト大使館職員)、インド・ナガランド州(東北部)のリアタン・ヌグリーさん(IC ボランティア)、インドネシア・パプア州のニアス・ワニムボさん(NGO 主宰)とチベットのノウシ・チェドンさん(インド在住・難民3世、IC ボランティア)という多様な背景を持った4名を招へいすることになりました。

5月10日から約5週間余にわたり東京都、静岡県、つくば市、九州各地(福岡市・北九州市・佐賀県・長崎県)で小学校から大学(インターナショナルスクールを含む)まで20校を訪問し、多くの生徒・学生さんたちと交流を重ねた他、障害者福祉サービス事業所やケアホーム等も訪問し在所者の方々との交流を図りました。

今回も各国の文化の紹介と、家庭の融和をテーマとした寸劇やICのメッセージソングに加え、メンバーのチェンジの体験の紹介等が行われました。まだ内戦やテロの続くアフガニスタンの厳しい現実や子供たちが置かれた貧弱な教育環境、難民としてインドで初めて自分たちのチベット民族の伝統や文化を学べるという状況、また、片道5時間を掛けて小学校に通っていたが、行っても先生が足りず結局校庭で遊ぶ日も多かったというような自身の体験から地域社会のために図書館を作り識字率の向上に取り組んでいるというインドネシア・パプア州のニアスさんの体験等が伝えられる

と、自分たちが如何に恵まれた環境の中で学んでいるのかが分ったという生徒さんたちの感想が多く聞かれました。

また、海外ボランティアの勇気を持って正直になったという色々な体験は、多くの生徒・学生さんたちに感動を与えました。更に東京での歓迎と送別を兼ねた2回のIC例会や福岡でのIC交流会では、それぞれの国や地域での人種的・宗教的・文化的軋轢などに起因する対立などが続いているという厳しい状況や、その中で自分たちがどのようにIC精神にのっとって状況の改善に尽くそうとしているかという実例や信念が語られました。

また、学校訪問はもとより、東京や静岡でのホームステイを始め、茶道や華道の体験、日本画家の工房への訪問や刀鍛冶の見学等々を通じ、多様な日本文化に触れ多くのことを学べたと感謝の言葉が述べられました。

(尚、このプログラムは、一般財団法人MRAハウス並びに一般社団法人東京倶楽部の助成を頂いて実施することができました。また、各地で会員の方々、並びに多くの個人・組織の方々にご支援を頂きましたことを併せてお礼申し上げます。)



長く教育に携わっておられる角杉美恵子さん(会員)と、今年、初めて行われた長崎・大村市での学校訪問をアレンジして下さった高見龍也さん(会員)から感想を寄せて頂きました。

人と人、心と心を繋ぐ架け橋 帝京大学准教授、元東京都公立中学校女性校長会会長 角杉 美恵子

東京での訪問は、来日して間もない中、海外青年ボランティアの皆様の心温かな人間性に触れ、彼らの誠実でひたむきな発表に精一杯応える子供たちの姿や純粋な気付きがあり、常に温かな雰囲気に含まれました。

特に、道徳的諸価値に基づく英語での寸劇鑑賞や、集団での『静かな時間』は自己を見つめ、他者を理解し、友人のチェンジの体験や心の動きを共感し合える貴重な体験です。正に新学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組みであり、多くの人に体験してもらいたいと考えます。

また、通訳として活躍された日本の学生さんの関わりがすばらしく、外国の方々と楽しく話す姿や子供たちへのメッセージを通して『私も何かやってみたい』と憧れや希望を抱かせ自己肯定感を喚起させてくれました。

更に、長年の取り組み成果を結集した『学校訪問プログラム実施報告書』は、子供たちの感動の様子や尊敬、感謝の言葉がいっぱい詰まっています。長年教育現場にいる私は、この冊子を読む度に「出会い・ふれあい・

学び合い」のワクワク感が蘇えり、もっと充実したプログラムにしようとの思いに駆られ、学校訪問プログラムチームでの活動の原動力にもなっています。

今後もチームの一員として、様々な場面でICの精神や学校訪問プログラムを展開し、Society5.0の超スマート社会を共によりよく生き抜く子供たちのために、人と人、心と心を繋ぎ、「ひとづくり」に貢献しようと考えています。



● 前列左から2人目が角杉さん(大田区立馬込中学校で)

長崎での学校訪問 大村市立中学校教諭 高見 龍也

長崎県大村市で初めて国際 IC 学校訪問を受け入れさせていただいた。生徒たちの昼休み時間に体育館で視聴覚機器の設定や衣装替えなどの準備をしていると、早くも異国の文化に興味がある女子生徒たち数人がやってきて、準備の様子を見入り、やがて手伝いをしてくれた。

授業が始まり、学校訪問ボランティアグループ 4 人が手慣れた段取りでパワーポイントの映像を用いた母国紹介、家族愛をテーマにした寸劇や歌を披露した。

生徒たちの感想文を読むと、アフガニスタンでの学校が爆破されて戸外の青空教室で学ぶ姿に驚いた生徒が多かった。4 人の民族衣装や風習にも興味津々のようであった。そして、何よりも寸劇を見て「今日は、家に帰ったら妹にやさしく接しようとおもった」「母の肩をたたいてあげようと思った」などと、生徒た

ちの道徳心に響いたようであった。異文化理解と道徳心の涵養という学校訪問の目的を達成することができたと感じた。

私は、以前から学校訪問で長崎県に来ていただく機会があれば、長崎市原爆ドームと潜伏キリシタン関連遺産を見学していただきたいと願っていた。どちらも、日本の歴史、いや人類の歴史を知るうえで、欠かすことができない史実だと考えるからである。

今回 4 人の方をそれらの史跡にお連れして、彼らが語ったことは、広島と長崎は彼らの母国においても有名な街であるが、現地に来て原爆の惨禍をリアルに感じる事ができたということであった。

今回の学校訪問が、生徒たちと 4 人のメンバー双方にとって有意義な体験であったことと信じる。

Trustbuilding Program 理事 田中 章博

IC 国際本部(スイス)は「Trustbuilding((信頼構築) Program)」を認定して、世界に広げることを決定した。これは世界各地で人種、宗教、文化の違いによる摩擦や分断が起きている中、互いの違いを認め合い対等な関係を築き、社会的繋がりを持って共に生きることを学ぶプログラムである。プログラム実施のため、IC 国際本部はアメリカの「Petzer Institute」より今後 4 年間に \$ 200 万ドル(約 2 億 2 千万円)の助成金を受ける契約を交わした。プログラム実施のため、IC 関係者の中から選定したトレーナーをプログラム受け入れ国に派遣して現地人トレーナーを養成し、彼らとともに現地社会にプログラムを導入することとした。試験的に 3 か国(カナダ、ケニヤ、フランス)でプログラム実施を 9 月よりスタートした。

2020 年 3 月に試験的実施の評価を行い、5 月以降にさらに新しい国に拡大してゆく予定である。プログラム実施の受け入れは各国の決定に任せ、プログラム内容と期間は各国の実情に合わせることにしている。

総会のお知らせ

来年の総会についてのお知らせ

日時：令和 2 年 3 月 14 日(土)

10:30 ~ 12:30(予定)

会場：有明教育芸術短期大学

(東京都江東区有明 2-9-2)

アクセス：JR 京葉線、りんかい線 「豊洲駅」下車

なお、同日午後 13:30 から同じ会場で、学校訪問プログラムチームによるイベント(交流会)が予定されています。皆様お誘いあわせの上ご参加ください。

インド国際会議のお知らせ 理事 兼松 恵

1. 「インド ICB 国際会議」【CRT 日本委員会からのご案内】

2020 年 2 月 3 日～ 6 日 於：インド、パンチガニー アジアプラトーセンター

アジアを中心に世界各地からの参加者とともに、貧富の格差を始めとする課題また多様な価値観につき論議を行い、企業が果たすべき役割について意見交換を行う。

テーマ：Creating Value by Building Trust

滞在費(宿泊・食事込、ムンバイ 1 泊とパンチガニー 3 泊) 約 ¥ 80,000

2. 「インド IC 国際会議」

2020 年 2 月 7 日～ 11 日 於：インド、パンチガニー アジアプラトーセンター

IC インターナショナルは、IC インドとの共催で、「人道的な世界に向けて」の演題でエキサイティングな国際会議を開催いたします。会議は世界の危機にどう応えていくかに焦点を置き、IC の精神で変化をもたらすために尽力している人々のネットワークを紡いでいきます。

テーマ：人道的な世界(思いやりのある世界)に向けて

4 つのサブテーマ：①持続可能性、②デモクラシー、③包括的、④信頼

滞在費 US \$ 200(宿泊・食事込、パンチガニー 4 泊)

本年の国際フォーラムに参加されたラオゴ夫妻からも、日本協会からの参加を待っています、との伝言を頂いております。

* 両会議に参加ご希望の会員は、事務局までご連絡ください。会員以外の方のご参加もお待ちしております。

事務局からのお知らせ 新事務局長の挨拶

今年の 4 月から事務局に参りました宮下暁(みやした あきら)と申します。よろしくお申し上げます。

私が、初めて MRA 活動を知ったのは 1979 年(昭和 54)の夏のことだったと記憶しています。箱根の強羅で会議があり、参加された海外の方々を会社の保養所でお世話したことが思い出されます。以来 40 年が過ぎている訳ですが、その間 IC 協会の活動に一貫して携わってこられた方々のご尽力・ご苦勞には頭が下がる思いです。

事務局として、協会活動が発展して行くように微力ながら力を尽くしたいと思っております。

皆様のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。